
もう1つの生徒会～杉崎鍵のハーレム～

水無月 琴音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの生徒会〜杉崎鍵のハーレム〜

【コード】

N4904H

【作者名】

水無月 琴音

【あらすじ】

これは本編にはなかった杉崎鍵のハーレムを描いたもの・・・本当のあるべき姿なのかもしれない・・・

生徒会の一存〜深夏〜

「はぁ・・・深夏来ないな・・・。深夏・・・すう」

「鍵？起きろよ鍵！」（背中を押す）

「う、ううん？あれ、深夏？俺・・・寝てたのか？」

「ああ、ぐっすり寝てたぞ。疲れてんのか？」

「そうかもしれないな・・・ごめんな、せつかくきてくれたのに」

「いって、無理すんなよ？あたしには鍵しか・・・」

「どうした深夏？顔が真っ赤だぞ！熱でも・・・あるのか？」（おでこに手を触れる）

「鍵／＼／＼／」

「熱は・・・ないようだな」

「鍵！その・・・あたし・・・」

「・・・深夏？」

「あ、あたしってさ、男が苦手だし、こんなにがさつだし・・・鍵に迷惑ばっかかけてさ

自分でも分かっていたんだ。

あたしには、鍵が必要だって！」

「深夏・・・お前」

「だからさ、こんながさつなあたしと・・・」

「深夏、俺と付き合ってくれないか？」

「え、鍵？」

「俺は深夏が好きなんだ。誰振りかまわず好きと言って、ハーレムを目指してるだなんて言ってるけど、やっぱり・・・俺のことをわかってくれてるのは深夏だから」

「鍵、こんなあたしでも、好きって・・・言ってくれるのか？」

「ああ、深夏は深夏だ。どんな深夏でも、俺は好きなんだ。それ以上幸せなことって、ないだろ？」

「・・・鍵、ありがと」（抱きつく）

「深夏・・・これからよろしくな」

「こっちこそ・・・よろしく」

「と、言う夢を見たんですが・・・」

「うわぁ・・・杉崎の頭は本当に腐っちゃってるわね」

「何ですか会長？俺の見た夢に口出さないでくれますか！」

「でも、お姉ちゃんが先輩と付き合っつて言うのは、真冬、ちょっとがっかりです!！」

「え、なんでなの真冬ちゃん？」

「だって先輩には、中目黒先輩という方がいるのに・・・お姉ちゃんどだなんて」

「だから、中目黒と俺は関係ないって!！」

「いいえ、ありますよ!！そもそもお2人には・・・」(2人の関係について延々と話す)

「ねえ深夏？さつきから上の空だけど、もしかしてキー君と同じ夢を見たんじゃないの？」

「え・・・あ／／／／」

「別に恥ずかしかることはないのよ？好きになるのは当たり前よ」

「でも、知弦さん・・・鍵はあたしのこと、どう思っていると思う?」

「そつねえ・・・やっぱり、恋愛感情を持っていると思っつわよ?」

「そつか・・・なら、鍵!！」

「ど、どうした深夏!?!いきなり大声上げて・・・」

「ちょっとあたしのお話を聞いてくれないか？」

「？別にいいぞ？」

「け、鍵は・・・あたしのことどう思ってるんだ？」

「・・・好きだ。俺は深夏のが好きだ。深夏を1人の女として好きだ」

「だったら鍵、その・・・あたしと・・・」

「俺と付き合ってくれ深夏！俺の傍にずっと居てくれ！」

「あたしなんかで・・・いいのか？」

「言っただろ？俺の傍にいてくれて」

「鍵、あたしは素直になれないけど・・・鍵になら！」

「深夏・・・」

「鍵・・・」

「こほん」

「／／／／／」

「告白するのは構わないけど、ここは生徒会室よ？少しは考えてね2人とモ」

「まあまあアカちゃんもそう言わないの。せっかく2人が気持ちを

ぶつけたんだし・・・ね？」

「そお〜ですよ会長さん！ここは喜びましょうよ」

「知弦・・・真冬ちゃん・・・そうね、おめでと！深夏、杉崎」

「そ、そんなに拍手しなくても・・・って、鍵！髪を解くな！」

「いいだろ、深夏？」

「ま、まあ・・・いいけどよ」

「これからも一緒だぞ、深夏」

「ああ、これからもな！」

生徒会の一存〜真冬〜

「真冬ちゃん、こんな俺で・・・いいの？」

「いまさらなんでそんなことを言うんですか？真冬は先輩が好きなのに・・・」

「う、うめん」

「ふふ、いいですよ 気にしてません」

「ねえ真冬ちゃん・・・」

「なんですか先輩？」

「やっぱりちゃんと言わないと、駄目・・・かな？」

「当たり前じゃないですか！真冬はちゃんと先輩への想いを告白したのに、先輩は何も言ってくれないなんて、おかしいです！」

「やっぱり、そうだよね・・・こほん」

「先輩？」

「俺は真冬ちゃんの全てを受け止めるよ。真冬ちゃんを守るなら、どんな屈強にも立ち向かう。俺にとって真冬ちゃんが全てだから・・・だから、好きだよ真冬ちゃん」

「す、杉崎・・・ここは生徒会室なのよ！！それに真冬ちゃんも！

「！」

「あ、会長さん・・・いたんですか？」

「最初からいたわよ！！」

「「最初から!？」」

「え、気づかなかったの!？う、うええええん知弦」

「よしよしアカちゃん、泣かないの」

「だってだって！杉崎と真冬ちゃんが」

「もう、認めてあげなさい」

「う・・・うう」

「真冬」

「お姉ちゃん・・・」

「真冬、いいか？後悔だけはするなよ？」

「え？」

「鍵と付き合って、後悔だけはするな。もし後悔すると思うなら、今ここで別れる」

「・・・お姉ちゃん、真冬は後悔なんてしないよ！真冬は先輩が好き

なの!」

「・・・そっか、ならいい。鍵、真冬をよろしく頼むな?」

「あ、ああ・・・大切にするよ」

「キー君、あまり派手なことはしちや駄目よ?」

「そっだよ杉崎!真冬ちゃんに迷惑掛けちゃだめだからね!」

「分かってますよ」

「先輩、これからも真冬を好きでいてくださいね」

「ああ、幸せにするよ真冬ちゃん」

生徒会の一存（真冬）（後書き）

最初に深夏、次に真冬と椎名姉妹を書きました。
次はやはり先輩となるので、お楽しみに

生徒会の一存くりむ

「こ、これからは杉崎のことを、け、鍵って呼ぶわね／＼／＼／」

「じゃじゃあ俺も・・・くりむって・・・呼びます」

「ね、ねえ鍵!!!」

「な、なんだ・・・くりむ!!!」

「っふ、ふふふ」

「オ、オモシロすぎるぜこの2人」

「ドがつくほどのバカップルですね」

「う、うるしやい!」

「アカちゃんったら、照れちゃって」

「あううう」

「それにしても鍵、よく会長と付き合っ気になったな」(後ろから抱きつきながら)

「あ、ああ・・・一緒にいて楽しいし、それに」

「それに?」

「守ってやりたいんだよ、隣でさ」

「そっか、そうだよな・・・会長、ちっこいもんな！」

「深夏！私の鍵に何してるのよ！それに、ちっこくないわよ！！」

（ジツとくりむを見ながら）「・・・つるぺた」

「むきゃー！！」

「深夏、言い過ぎだぞ？」

「す、すまねえ・・・言い過ぎたよ」（鍵から離れる）

「かい・・・くりむ。気にするなよ？俺はどなんくりむでも好きだから」

「・・・ぐす、ホント？」（上目遣い）

「か、可愛いわアカちゃん」

「会長さん、萌えです」

「まったく、お子様にはかなわないな」

「お子様言っな〜！！」

「ええ、本当です。どなんくりむでも、俺は好きです」

「あ、ありがと・・・私も鍵のこと・・・好きだよ？」

「くりむ・・・」

「鍵・・・」

2人の唇が重なりあ・・・

ゴツン！！

「「痛っ！！」」

「あゝあ、せつかくのムードがあゝくすん」(涙を浮かべる)

「また・・・後で、ですね」

「ちょっと残念・・・」

「そう言わないで下さいね！っ」と(くりむをお姫様抱っこする)

「ひゃ、ひゃあ！鍵、いきなり何するのよ／＼／＼／＼」

「お、鍵！かっこいいじゃねえか！！」

「先輩、かっこいいです！！」

「アカちゃん、羨ましいわね」

「え、知弦さん？」

「な、なんでもないわ」

「と、とにかくおろひなひゃいよ〜」（ジタバタする）

「アカちゃん、せつかくしてもらってるんだから、大人しくしたほうがいいわよ?」

「だってえ、恥ずかしいよ〜」

「……キー君」

「何です、知弦さん?」

「そのままアカちゃんを連れて行きなさい!」

「了解です知弦さん!」

「は〜な〜せ〜」

「離しません!」

「うう、いじわる〜」

「意地悪でもいいです。くりむを独占できねば、ぬ〜」

「ほうう／＼／＼／＼」

「と〜と〜と〜、連れて行きます!」

「……」

20分後

「くりむ、着いたぞ」

「こ、ここは・・・？」

「俺の家です」

「ここが鍵の家・・・って！何で連れて来たの!？」

「いえ、特に理由はないんですが、知ってほしかったんです」

「・・・鍵」

「遠慮せずあがってください。多分林檎がいますよ..」

「え、じゃあ・・・邪魔します」

「あ、おにーちゃん、おかえり〜」（抱き）

「ああ、ただいま林檎。それと、嬉しいんだけど離れてくれないか？」

「・・・なんで？」

「そこにいる俺の彼女が、今にも怒り出しそうぞ...」（と、くりむのほうを見る）

「へ〜鍵ってば、妹さんといっつもそういっことするんだ〜ぶ〜ん」

「あ、その・・・ごめんなさい！えと、どつぞ」

「……………」

「くりむ、あまり怒らないでくれ」

「怒ってないよ・・・ただ、羨ましかっただけ」

「くりむ・・・」

「あれ、鍵の家ってこんなに広いだね」

「それでもないですよ？俺の部屋・・・来ます？」

「え、でも／＼／＼／」

「嫌ならいいですよ？」

「い、嫌じゃない・・・よ」

「では、早速」(再びお姫様抱っこ)

「は～な～せ」

「嫌です」

「ばかあ／＼／＼／」

「馬鹿で結構です。はい、着きました」

「あれ？意外と綺麗ね・・・」

「くりむがいつ来てもいいように、掃除してたんです」

「わ、私の為に・・・ありがとう」

「いいんですよ」

「それより鍵。そろそろ降ろしてくれないかな？その、恥ずかしい
／／／／／」

「え、あ、ゴメン」(くりむをベッドの上に降ろす)

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おにーちゃん、カルピス持って・・・あれ？りんごおじゃまだっ
た？」

「べべべ、別にー！！お邪魔じゃないわよー！！」

「そそそ、そうだぞ林檎！！邪魔じゃないぞー！！」

「・・・・・・・・おにーちゃん、怪しいよ」(苦笑)

「う・・・でも、何もしてないしな・・・くりむ」

「え、ええ・・・変なことしてないわね」

「りんごはおじゃまみたいだから出て行くね？おにーちゃん、おそ

「つちや駄目だよ?」

「……いい妹さんね」

「すみません」

「いいのよ、あれくらいのほうが可愛いわよ。さて、カルピスでも飲もうかな」

「あ、くりむ!少し……」

「え、何よ?……ブツ!ゲホゲホ、なによこれえ!?!」

「だから待てと言ったのに……こんなに汚して」

「ちよっ、ちよっと//////」

「動かないで下さい」

「ん……や、ちよっと鍵//////」

「くりむ……」(顔が近づいていく)

「鍵……」(唇を突き出す)

「……くしゅっ!」

「だ、誰よ//////」

「あちゃ、見つかっちまったか」(照れ笑い)

「え？深夏？」

「いい雰囲気だったわよアカちゃん」

「え？知弦さんまで！！」

「くしゅっ！真冬もいますよ」

「真冬ちゃん……」

「こらこら桜野、なんで私に付き合ってることを言わなかったんだ？」

「真儀瑠先生まで……」

（鍵に近づき）「で、どこまでいったんだ？」

「な、なにがですか？」

「だから、どこまでいったんだ？キスはしたのか？まさか、それ以上か？」

「し、しましたよ！！ええ、しました！！」

「鍵、何の話をしてるの？」

「いや、くりむ、その……」

「杉崎が桜野とキスをしたいそうだ！そうだろ？」

「え！ええ・・・まあその・・・したいです・・・」

「え、先輩？まだしてなかったんですか！？先輩ならとっくに会長さんと・・・」

「そうね。キー君ならそれ以上のことをしていると思ったのに、少し残念だわ」

「さつさとやっちまえよ鍵！今ここで！」

「な、何言ってるのよみんな！！私は・・・」

「くりむは・・・俺とじゃ嫌なのか？」

「え、えと・・・したいけど、恥ずかしいし・・・」

「くりむ？」

「な、何よ？ん・・・」

「・・・」

「お〜」

「・・・ぷは」

「い、いねで・・・いんだろ？」

「・・・／／／／／」

「け、鍵……もう一回……して?」(上目+潤んだ瞳)

「仰せのままに」

生徒会の一存くくりむゝ（後書き）

いやあ。会長の話は何かと書いていてわくわくしました
次はあの難解な知弦さんです
どうなるか楽しみですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904h/>

もう1つの生徒会～杉崎鍵のハーレム～

2010年10月12日05時19分発行